



1



2



3



4

地域医療を学びに全国各地から藤沢へ 住民と交流し、地域医療の魅力に触れる

藤沢町で「第3回藤沢地域医療セミナー」

市病院事業(佐藤元美病院事業管理者)が進める地域医療は、先進的なもので、毎年、全国各地から多くの医療関係者が研修や視察に訪れています。

8月10日から12日までの3日間、老人保健施設「老健ふじさわ」を拠点に「第3回藤沢地域医療セミナー」が開かれました。同セミナーには地域医療に必要な知識や技術を学ぼうと自治医大生や医療・福祉従事者など23人が参加。講義や地域住民との交流を通して、藤沢の地域医療の魅力に触れました。

セミナー初日は、齋藤昭彦市保健福祉部長が自身の体験談を交えながら、

1) 齋藤昭彦市保健福祉部長が30年の福祉事務経験を交えながら、市の高齢者の現状と医療・介護の連携について講話した/2) 講義を熱心に聴く参加者/3) 藤沢野焼祭会場に設置された縄文テント村で、地域住民と酒を酌み交わした/4) 日常の行動や介護の様子を話す鈴木みえさん(◎から3番目)。意見交換も活発に行われた/5) 縄文の炎が燃え上がる野焼祭会場

市の高齢者の現状と医療・介護の連携について講話。2日目の11日は、藤沢病院を支える会(西功雄代表)会員が案内人となり、在宅医療の利用者や家族の生の声に耳を傾けました。

このうち今年1月から訪問看護を利用している鈴木利男さん(94)宅を訪れたのは、同会会員を含む9人。「ずっと家にいたい」と言う利男さんを献身的に支える長女みえさん(63)は「看護師の接し方を勉強できたり、食事の相談などをできたりして助かっている」と話し、同会会員の小野寺房子さん(65)は「藤沢で暮らしてよかったと心から思う。連携の取れた医療を展開しているので安心できる」と加えました。

夜は、同日から行われた「藤沢野焼祭」会場の藤沢中運動広場特設縄文村へ移動しました。同会が開設した縄文テント村に腰を据えてまつりを堪能。酒を酌み交わしながら、住民との距離を縮めて地域の魅力に触れました。

市病院事業が地域住民の協力を得ながら運営した3日間。同セミナーの魅力は、言うまでもなく「住民との交流」です。地域医療は、医療関係者の力だけでは成り立たないという根本をつかんだ、藤沢の地域性が生んだプログラムには直にふれあい、声を聴き、語り合う機会が設けられています。

参加者が今後、医療に従事する中で「大きな糧にしてほしい」と地域が一体となってエールを送った同セミナー。普段は経験できない貴重な体験をした参加者の表情はたくましく、希望に満ちていました。



5

Pick-Up



駅 大船渡線
Local Station
Vol.09

陸中松川駅

Rikuchu Matsukawa sta.

「石灰の町を支えた駅」

JR大船渡線「陸中松川駅」は大正14年7月26日、摺沢駅とともに開業した。昭和61年11月に梶鼻溪駅が開業するまでは、東山町の玄関口として、1日300人以上が利用していた。宮沢賢治が働いていた旧東北砕石工場は駅のすぐそば。賢治ゆかりの駅でもある。国鉄職員として同駅に10年以上勤めた鈴木昭一さん(83)が今回の案内人。「東山町は言わずと知れた石灰の町。町の至る所に良質の石灰石が埋蔵されていて戦前から地場産業が盛んだった」と振り返る。同町にある石灰関連企業は10社。生産され

る製品のほとんどは、同駅から全国各地に貨車で輸送された。昭和29年から50年にかけての貨物出荷量は県内最多。東北屈指の貨物駅として発展してきた。最盛期には月100万トンを出荷したこともあり、100両以上の貨車が行き交っていたという。「東山の発展を支えてきた誇り高い駅。肥料、消石灰やセメントなどを全国各地に送り出し、戦後の復興に重要な役割を担ってきた」と誇らしげに語る昭一さん。賢治ゆかりの歴史ある駅を出ると、上り列車は岩ノ下駅に向かう。



④最盛期には7番線まであった陸中松川駅。貨物用の線路は、今なお残されている。
⑤駅舎そばに市が新設した公衆トイレは、8月1日から供用を開始。管理は地元の水ノ沢ひまわりの会が行っている。



◎駅の近くには「石と賢治のミュージアム」がある。ミュージアムまでは駅から続くトロッコ道を通っていくと便利だ。
⑥駅舎から見える工場。周辺には今も多くの石灰関連企業がある。

案内人

鈴木昭一さん
元国鉄職員



Suzuki Shoichi

陸中松川駅は石灰の町東山の産業を支えてきた地域の誇りです。昭和の時代、多くの貨車が行き交う光景は活気にあふれていました。